

# 安野光雅 逢えてよかった

## 30 河合隼雄

向などを確率の範囲内で予測しているだけで、予言者のように予言しているのではないはずだが、自殺が問題になると、メディアは「自死のサイン」などについて、心理学者にその見解を聞きたがる。

そんなこともあって心理学は人気があるが、「それは科学なのか」という疑問は消えない。数学者の森毅もたぶん同じだろうと思って聞いてみると、見解はおよそ一致するが、しかし「河合隼雄は（普通の心理学とは）ちがうよ」と言っていた。

驚いたことに、河合さんは京都大心理学部数学科をでて、フルブライト留学生としてカリフォルニア大学大学院に留学、その後（1962年4月）、スイスのユング研究所に留学している。

河合さんは、6人兄弟の5人めだという。

わたしは、自分の病を無視してエチオピアの山奥の絶壁までゲラダビヒの研究に出かけ、同じ研究員が山

へいくのを、泣きそうになりながら見送る兄がハヤブサ（隼雄）で、心理学をやるほうがミヤビ（雅雄）だとよく勘違いするのだが、実際は逆である。

わたしは見逃したが、この二人がNHKテレビで子ども時代の回想をする対談があつて、「あんなにおもしろい番組はなかった」と聞いた。兄（雅雄）は相当な権威をもって君臨していたらしい。再放送をやつてもらいたい。

話は元に戻る。河合隼雄さんのところで、ユング心理学の試みだとされる箱庭をつくらせてもらったことがある。

河合さんが箱庭の砂に湿り気をおたえ、その箱庭で遊べるように砂を混ぜたり平らにしたりして準備なるところを、わたしは後ろから見ていた。

いつの間にかその後ろ姿に、わたしの父の後ろ姿を見る思いがしてき

のである。

その父が、わたしに遊ぶ場所をつくってくれているという感じである。箱庭の準備ができると、「まてよ、ここにわたしの深層があらわれるのは困るな」と思い始めていた。

疑い深いわたしは、手を動かしているうちに、わたしは砂山に曲がつた溝を掘り始めていた。それは津和野を流れる川になった。行動範囲の中ではいちばん遠かつた鷺原（なぐさ）というところから流れ始め、高崩（たかね）につきあたり、さらに曲折して箱庭のそとへ向かった。このいいかたは、たぶん人が見たら、わたしが抽象彫刻を彫っているように見えただろう。河合さんにもその溝が懐かしい津和野の川だとはわかるまい。右手の山には城山があり、小学校があり、川の一部にはわたしが子どもの頃泳いだ亀の甲という名の指定の水泳場があるのだ。わたしにだけ見えていた、わたしの家の位置もおよそそのあたりと思ひながら砂をなでて夢中になつてしまった。そうして、たいしたこともしていないはずなのに、充実した時がすぎた。

かわい・はやお 1928〜2007年。心理学者、元文化庁長官。「昔話と日本人の心」で大佛次郎賞。「ユング心理学入門」「ユングの生涯」「河合隼雄著作集」「ココロの止まり木」など著書多数

ユングの箱庭につくった津和野の川

予言者というものがある。時に神と混同されるくらい、人間は一寸先のことをしりたがる。科学はそのために進歩したとも言えるが、その科学の方法からの予測、たとえば天気予報がそうだが、とりわけ日蝕や月蝕の予報くらい厳肅なものはない。競馬の予想屋というものもわからないが、「あれは参考にするだけだ」ということは、その予想を買うものもわかっている」らしい。

心理学もたぶん、人間の動向や傾

河合さんは、にこにこして見ていた。つくっていたものが何であるか、そういうクイズに答えるつもりではなく、わたしの動き全体を見ていたのだからと思う。

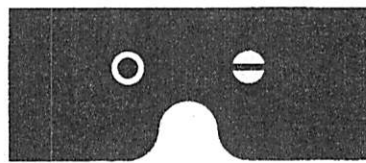
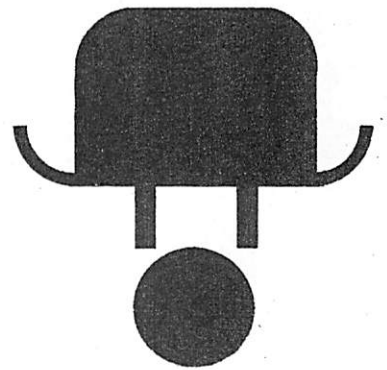
河合さんはその後、文化庁長官になった。

たとえば、高松塚古墳にカビがはえたとか、イタリアの画家のまねが明らかかな画家に芸術選奨を授与したのはおかしい、ということになって、河合さんは公開の席で、責任者として謝らねばならなくなった。責任は古墳の直接の管理人や審査員などを通り越して、長官のところまでやってくる。河合さんは職務上、観念して頭を下げた。

ついでにいうが、日本では何事もその責任者のせいになる。

よく、小さな会社などでは、「火元責任者、何のだれ兵衛」と書いた札を見ることがあるが、だれでも責任は重い。このごろ、「命をかける」などということばをよく聞く。「あなたの命をかけてもらったくらいではすまないのだ」と言いたくなることもある。

テレビで河合さんが頭を下げた場面を見た夕方、東京・新宿のワシントンホテルの喫茶店で河合さんに会った。「あんた、そんなことしていい



安野さんが作った河合隼雄財団のロゴマーク候補、ウインクがきまった。左は河合さん

ないで、長官なんぞやめてかえりなはれ」と、女房が言うとりますねん」と言っていた。好きでやったのではないし望んだでもない。わたしの記憶では、あれは小泉総理の要請だったと思う。

河合さんからその後、電話があったとき、わたしは昼寝をしていた。そのころ三笠書房へいつていた古谷という編集者のところへ用件があったわって、装丁のために描いた「おまえ百までわしゃ九十九まで」の絵を「NPO活動としての『文化創造』のシンボルマークに使わせてもらいたい」ということだった。「もちろんそんなこといいけど」と言っ古谷との電話をきった。

何というのんきな昼寝だったのだらう。

驚いたことに河合さんは、その夜眠って起きてこなくなった。つまり、わたしは河合さんと話すことができなくなつた。でもまあ、長くても2、3日したら目が覚めるのだからと思つていたが意外に重体で、眠り続けているらしい。

みる、こんなことになってしまった。頭を下げたことと因果関係はないにしても河合さんは起きないのだ。とりわけ盗作の疑いのある作品に賞を出した人ももらった人も、だまつているというのは困るではないか。と思うが、いくら言ってみても河合さんが起きてくるわけではなかった。

もうそんなに時間がすぎたのか、5年前の2007年7月19日、79歳でかえらぬ人となった。これを書いているのが、くしくもびったり5年後の7月19日である。

ご子息の河合俊雄さんから、手紙が来た。財団法人河合隼雄財団のために、ロゴマークをお願いしたい、という趣旨だった。

そこには「わたしは海外出張のため17日に電話する」とあった。その電話の声は留守電に入っていた。わたしは「海外からかえられるころには、描いておきます」と葉書をだしたあとだった。

その後、新潮社の人から、丁寧な電話をいただいた。

これから、そのロゴマークを描くが、その採用がきまつたら、それをこの欄の装面に使いたいと思つている。

(コロンデモタダデハオキナイ)

先年、奈良の絵を描きにいき、その折、河合さんのいた西大寺にもいった(御自宅へはいかなかつた)。

あのとき、西大寺そのものは大きい寺だと思つた。東大寺なみに由緒のある寺にちがいない。近所で絵を描いたが、西大寺そのものは描けなかつた。河合さんの家へいく道を描いた。それは産経新聞に掲載された。その場所へいつて絵を描く人があると聞いた。河合さんにたいする、供養のような気がした。

河合さんからその後、電話があったとき、わたしは昼寝をしていた。そのころ三笠書房へいつていた古谷という編集者のところへ用件があったわって、装丁のために描いた「おまえ百までわしゃ九十九まで」の絵を「NPO活動としての『文化創造』のシンボルマークに使わせてもらいたい」ということだった。「もちろんそんなこといいけど」と言っ古谷との電話をきった。

何というのんきな昼寝だったのだらう。

驚いたことに河合さんは、その夜眠って起きてこなくなった。つまり、わたしは河合さんと話すことができなくなつた。でもまあ、長くても2、3日したら目が覚めるのだからと思つていたが意外に重体で、眠り続けているらしい。

みる、こんなことになってしまった。頭を下げたことと因果関係はないにしても河合さんは起きないのだ。とりわけ盗作の疑いのある作品に賞を出した人ももらった人も、だまつているというのは困るではないか。と思うが、いくら言ってみても河合さんが起きてくるわけではなかった。

もうそんなに時間がすぎたのか、5年前の2007年7月19日、79歳でかえらぬ人となった。これを書いているのが、くしくもびったり5年後の7月19日である。

ご子息の河合俊雄さんから、手紙が来た。財団法人河合隼雄財団のために、ロゴマークをお願いしたい、という趣旨だった。

そこには「わたしは海外出張のため17日に電話する」とあった。その電話の声は留守電に入っていた。わたしは「海外からかえられるころには、描いておきます」と葉書をだしたあとだった。

その後、新潮社の人から、丁寧な電話をいただいた。

これから、そのロゴマークを描くが、その採用がきまつたら、それをこの欄の装面に使いたいと思つている。

(コロンデモタダデハオキナイ)

先年、奈良の絵を描きにいき、その折、河合さんのいた西大寺にもいった(御自宅へはいかなかつた)。

あのとき、西大寺そのものは大きい寺だと思つた。東大寺なみに由緒のある寺にちがいない。近所で絵を描いたが、西大寺そのものは描けなかつた。河合さんの家へいく道を描いた。それは産経新聞に掲載された。その場所へいつて絵を描く人があると聞いた。河合さんにたいする、供養のような気がした。